

第二回留学報告書

白川亮

マサチューセッツ工科大学

こんにちは。マサチューセッツ工科大学（MIT）経済学部で博士課程一年生の白川亮です。初めての海外生活ということで色々ありましたので、簡単に報告させていただきます。

1. 生活

ボストンに到着してから初めに薬局に行きました。トイレットペーパーとかティッシュとかそういうものを買おうと思っていたのですが、そこでペットボトルの水が3ドルとかで売っていたので結構不安に感じました。幸い無料のコーヒーマーカーと炭酸水がキャンパスの色々な建物内に設置されているので、水にはお金を使わずに済んでいます。

ほとんどのプログラムはそうだと思いますが、授業が始まる直前に留学生対象で英語の試験があります。あまり結果が良くないと英語の授業を取るように勧められるのですが、あまり結果が良くなかったので授業を取るように勧められました。実際に勧められた授業を取るかどうかは別にして、確かに友達の言っていることがわからない事も多くて実際に困っているので、少しずつ英語は改善していきたいです。

事前に聞いてはいましたが、こちらでは色々イベントが発生します。その中で、サンクスギビングのタイミングに日本人学生みんなで日本食をいただくという会がありました。丸いテーブルの端に炊飯器が置いてあって、みんなでテーブルの周りをクルクルまわりながら順番にご飯を取って手巻き寿司をいただいたのが印象に残っています。留学したら日本食が恋しくなったりするのかなとか想像していましたが、こういうイベントもあってくれるのと、比較的食に関心がない方なので今のところそうはなっていません。

2. 授業

今学期は、一年生の必修授業（マイクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学）を除くと、産業組織論と契約理論を履修しました。それから先生にお誘いいただいたので嬉しくてうっかりタイトル不明の授業を取ったのですが、この授業が少し大変でした。正直、課題は全然解けませんという感じだったのですが、幸い同期に頭のいい人が居たので、彼に教えてもらいながらなんとか提出しました。少しだけ具体的には、ある意思決定主体が直面している意思決定のモデルを勘違いしている時、最終的に正しいモデルをどれだけ認識できるのかという問や、最終的にどのような行動をとるようになるのかという問などを解くにあたって有用なツールを色々学びました。実は少し知りたかった内容だったので、結果的には履修して良かったと思います。

残念ながら今学期は課題でほとんどの時間を使ってしまいました。博士課程の成績なんか誰も気にしないという話をよく聞くのですが、とはいえ課題を出さないで落第する訳にもいきません。あまり研究をする時間は取れませんでした、それぞれの授業で成長できた気が少ししている、数年後に素晴らしい研究ができるために必要な投資期間だと思ふことにします。

3. 研究

学部生時代の研究の一部を「On the Core of a Patent Licensing Game」という短めの論文にしたものが Economics Letters というジャーナルに掲載されました。これは、三年ほど前にあるジャーナルから改訂要求を受けた論文が別があり、そこで「全体を書き直すくらい significant に改善しないと速攻でリジェクトするぞ」みたいなことを言われましたので、頑張っって新しい論文を書く勢いで改訂した過程で生まれた新しい論文です（そしてリジェクトされました）。寡占市場において、企業と特許保有者の間で起こりうる提携構造を調べています。ちなみに Economics Letters からは論文本体よりも長いような査読コメントをいただきました。

それから、修士論文「School Choice: A Behavioral Approach」が American Economic Journal: Microeconomics というジャーナルから改訂要求をいただきました。学生と学校を集権的にマッチさせる時に大事とされている公理を再考して、その下で望ましいマッチングのアルゴリズムを提案しています。まだ採択をされた訳でもなんでもありませんが、このジャーナルは修士論文を載せるには掲載難度の結構高いところで、改訂要求が来るだけでも、これまでの短い研究人生の中では一番嬉しかったです。この論文はこれまで二回別のジャーナルにリジェクトされていて、辛いとか思っていたところなのでした。幸い査読者は皆様好意的でしたので、掲載まで持っていけるように頑張ります。

最後に、留学直前に執筆した論文を改訂して「Information Design in Pandora's Problem」というタイトルで新たに公開しました。パンドラの問題では、ある個人（パンドラ）が、それぞれの選択肢（箱）を取るとどのくらいの満足度が得られそうかを好きな順番に調べて、最後にそのうち一つを選択肢を選ぶ、という形の意味決定を考えます。このような枠組みには一般にサーチ理論という名前が付いていて、研究開発やオンラインショッピングなど、様々な文脈で応用されています。僕たちの研究は、このようなサーチのプロセスの中で、各選択肢から得られる満足度に関する情報をどのくらい、どのように公開すると良さそうか、という問いを考えています。パンドラの問題に関して大変重要な論文を書いている先生が MIT にたまたまビジットで来ていて、運よくフィードバックをいただけました。引き続き改訂作業を続けます。

■ 最後に

こちらの物価は結構高いのですが、船井財団様のご支援により金銭面が気にならない、素晴らしい留学生活ができています。来学期も頑張ります。